人生の回り道

西村 梓
From シンガポール

高校生の頃の私には、こんな夢があった。
「国際機関で働いて、恵まれない子供たちを救う。プライベートでは、**35** 歳ぐらいまでに志を同じくするパートナーと結婚して、素敵な家庭を築いている。」
2024 年 **7** 月現在 **40** 歳。
その、どちらも叶っていない（笑）

最初の挫折は、大学に入学した時だった。
毎日頭痛に悩まされるぐらい必死に勉強し、やっとの思いで入学した憧れの大学に順応することができなかった。
そこには、馴染めない煌びやかな都会の生活や希薄な人間関係があり、何の問題もなく英語を話す帰国子女の同級生がいた。幼いころから抱えていたコンプレックスを指摘される場面にも遭遇した。そんな日常に疲れた私は、トラウマで通学ができなくなった。
思いつめたある日、過呼吸で病院に搬送され、ついに私は休学を決意した。

富士山と雲海を眺められる長野県高峰高原ホテル

昔の自分を取り戻すため、心機一転、長野県でリゾートバイトをすることにした。富士山が遠くに見下ろせる自然環境豊かなホテルで働き、徐々に自分を肯定できるようになった。
高知から内閣府主催の「世界青年の船」事業に参加したり、高知で外国人研修員を受け入れたり、さまざまな国際交流ボランティアをしたことも自信を取り戻す助けになった。
大学は **2** 年間休学したが、復学する気持ちにはなれず、別の大学の通信教育課程で法律を学ぶことにした。大量に送られてくる教科書の山と対峙し、無事法学部を卒業したときには、すでに **26** 歳になっていた。

2 回目の挫折は、**28** 歳のとき、アフリカから帰国した時だった。

マラウイの景色

JICA ボランティアとして **2** 年間マラウイで過ごした後、私は国際機関で働きたいという目標を失ってしまった。
ライフラインがままならないマラウイ奥地での生活が楽しくなかったわけではない。憧れのアフリカでの生活は、驚きと発見の連続だった。地平線に沈む真っ赤な太陽を眺めながらバイクで走行するのは、最高の気分だった。

マラウイでの生活にも慣れ始めたころ、もう一人の自分の声が大きくなりはじめてきた。
「何か違う。国際機関で働くことが、本当に自分のやりたいことだろうか？」
これから何百年、国連の事業を続けたとして、それによって発展途上国の経済や国家体制が成熟し、先進国のような自立した国家になるのだろうか。慈善団体や各国の拠出金の一部を自らの給料とし生計を立てることが、本当に自分が追求する人生哲学を体現していると言えるのか？

年齢的にも国際機関での就職を目指すことが厳しくなっていた私は、目指すべき道を失い、帰国後は、協力隊員時代に得たわずかな手当を食いつぶして生活した。いろいろ迷いながら、シンガポールで就職すること決意するまで、**1** 年を要した。

このように、私には仕事にも就かず通学もしていない、いわゆるフリーターの時代が合計 **3** 年間ほどある。自分を肯定できなかったり、将来何がしたいか分からなかったり、宙ぶらりんの毎日は苦しかった。高校生のときの「あの壮大な夢はどこに行った？」と、嫌悪感に陥ることもあった。

あれから **10** 数年が経った今、私はそんな **3** 年間が今の自分の幸福につながっていると感じている。なぜなら、社会の常識というレールから外れたことで、自由に物事を考えられるようになり、いつの間にか私は幸福度を測るモノサシを自分で作り上げることができたからだ。今は、生きたい人生と、自分にとって幸せとは何かを自由に考えることができている。

挫折は、人生の失敗ではなくただの「回り道」。そして、いつかその回り道が貴方の人生を豊かにし、広く深い幸福感に変えていく。この言葉を今、青少年に届けたい。

最後に、青少年の皆さんには、今のうちから古典や歴史書、偉人伝を読むことをお勧めしたい。**2500** 年の時を経てもなお語り継がれるお釈迦様や孔子様、イエス様のメッセージは人生哲学の宝庫。私は無宗教者だが、人智を越えた天の存在は信じている。苦しい時、古典が心の安定剤になった。こうした偉人たちのことを、宗教ではなく、一人の人間の生き様として学んでほしい。自分たちが生きる高々数十年なんて、宇宙から見ればちっぽけなもの。生命を賭して真理を追求した先人から、幸福に生きることのヒントを得てほしい。

KOCHI IYEO HP

2024 年 **7** 月 **19** 日発行
発行者
高知県青年国際交流機構
（**KOCHI IYEO**）
会長 前田正也
090-9552-0022
xiwang@yacht.ocn.ne.jp